

百日咳(2012年8月18日rv)

2年前の開院直後に咳喘息として2ヵ月治療された患者さんがきました。特有の引き込みのある咳、他の同居人に同様の症状が後日出たことから、感染性それも百日咳を疑い検査し確認されました。複数の乳児例もその後経験しました。ここで、咳症状の代表である百日咳について簡単にまとめました。

1. 症状

世界で1年に6千万人がかかりそのうち50万人以上が死亡している重篤な疾患です。予防接種により利益の得た疾患の代表です。感染後の潜伏期は約1週間で、その後最初は、鼻水軽い咳で始まり、その後強い咳となります。強い咳とは、咳き込みが何回も持続する、咳込み時に顔が赤くなる・目が飛び出る・舌を出す、たくさん咳をした後の息の引き込み音(ヒュー、whoopingといいます)、咳込み時の嘔吐を伴う等をいいます。また新生児・乳児は咳込み出来ずにいきなり呼吸がとまる症状を示すこともあり、新生児乳児突然死の原因の1つです。とにかく診断は、丁寧な問診と咳症状を直接聞く医師にかかるかどうかです。強い咳込みの結果、顔に点状の出血斑がでたりまぶたが腫れたりすることもあります。このような咳が通常1月以上続き、百日咳菌の出す毒素により脳症をおこすこともあります。

2. 診断

強い咳をおこす病気は、マイコプラズマ感染症、パラインフルエンザ、結核、喘息、異物誤飲等があげられます。白血球数 血液の抗体価等を調べます。米国では鼻咽頭からの検体をPCR法で調べる様になり百日咳の診断率が増加しましたが、日本の保険医療ではできません。菌の確認をとNelsonの教科書に書かれておりますが結果に時間がかかる、痛い、難しい培養等であまりおこなわれません。白血球とくにリンパ球(幼弱)の増加が特徴的で、これを誤認白血病と診断・治療した例があると聞いた事があります。

3. 治療

マクロライド系の抗生剤。新生児期はジスロマック5日投与が良いとされています。1歳までのお子様の咳・鼻水は信頼できる小児科医に受診が肝要です。

4. 予防接種

ワクチンは百日咳の感染者・死亡者を激減させましたが、三種混合ワクチンの効果は長期に持続するわけではありません(3-5年程度と記述されている)、ワクチン接種してもあるいは百日咳感染の既往があってもかかる可能性があることに留意が必要です。また米国では、ワクチン副作用懸念から百日咳ワクチンに無細胞型が導入され免疫の持続が短くなり百日咳の再流行が起こっています。冒頭のお子様もワクチン既往のある方です。生後3月(本来は早期が望ましい米国では出生時から接種も検討)から三種混合ワクチン接種ですが、Hibと肺炎球菌ワクチン同時接種も可能(インフル同時も可能)で、今は健診をふくめた同時接種ができます。日本での2種混合(DT)は3種に変更すべきです。

参考文献

2012年6月の米国医学誌N Engl J Med 366:e39 June 21, 2012でWhooping Cough in an Adult(成人の引き込みのある咳)で3週持続する咳で喘息として入院した64歳男性が百日咳であった顛末が書かれています(その咳はビデオ提示されています)冒頭の症例と似ています。咳のビデオは<http://www.nejm.org/doi/full/10.1056/NEJMicm1111819>

Cherry JD:Epidemic Pertussis in 2012 — The Resurgence of a Vaccine-Preventable Disease

.August 15, 2012 (10.1056/NEJMp1209051)



Incidence of Pertussis per 100,000 Population in the United States, 1980–2011.

左図(文献2からの引用);米国での百日咳罹患急上昇。要因としてワクチン忌避(カリフォルニア州)、ワクチンが無細胞型に変えワクチンの効果が低下(ワクチン副作用懸念からの変更だが逆に患者を増やし死亡例を増加させた)、百日咳菌が変化しワクチンが効かないタイプになった等が挙げられている。

日本でも、1975年3種混合ワクチン接種後に因果関係不明の2名の死亡後ワクチン悪の大報道から3種混合ワクチンが1時中止となり凄まじい患者数と死亡例を出した事がありました。

リスク利益を正しく評価する政策が必要です。